



平成29年2月7日

目黒区立学校第三者評価
評価責任者 小池 和男

目黒区立第八中学校第三者評価結果報告書

1 第三者評価の実施内容

- (1) 第1回学校訪問 平成28年9月13日（火） 午前9時20分～午後4時00分
・校長、養護教諭、PTA会長を対象としたヒアリング
- (2) 第2回学校訪問 平成28年9月20日（火） 午前9時20分～午後3時30分
・主幹教諭、学校評議員、副校長を対象としたヒアリング
・教育活動の参観
・評価者から学校への助言

2 評価者

帝京科学大学教職センター長 教授 小池 和男
宇都宮海星女子学院中学校・高等学校長 齋藤 直子

3 評価結果

〔○…成果、●…課題、◎…成果と課題の両者を含む〕

評 価 項 目		評 価
(1) 前年度の 学校評価 について	ア 四者による学校 評価アンケート結 果を踏まえて、適 切に自己評価をし ている。	○四者による評価では、全般に学校の改善努力が認められる。学校が結果を踏まえて、組織的に対応しようとしている状況が保護者や地域に理解されてきている。 ○学習指導及び体育・健康教育については、保護者と学校の認識に差があることを自己評価し、生徒の実態に即した授業の実施や健康づくりについての講座等を公開する提案がなされていることは評価できる。 ●生徒による学校評価で、多くの項目が満足できる水準に到達している中、「少人数指導」の有効性は、他項目と比較してみると「もっと○○してほしい」ではなく「自分でももっと努力できたはずだ」という自省しているところも感じる。特に少人数指導については、現在のこの指導形態が自校の学力構造に本当に合っているのか検討すべきと考える。

	イ 学校関係者評価結果に基づいた教育課程を編成している。	○学習指導の充実のために、各教科等における指導方法の改善と個に応じた学習指導の工夫、数学科、英語科における習熟度別少人数指導及びＩＣＴ機器の活用などが教育課程に明確に位置付けられている。授業参観において、教科担任の組織的な改善努力の姿が確認されており、さらなる共有化に期待したい。 ●生徒を育成する言葉かけ「まかせる 褒める 受け止める」が全教職員に浸透してきている。各生徒にどの場面でどのように言葉かけをして成長させていくか、共通理解と育成の具体的な事例を人権教育と結び付けて検証するなどの工夫が望まれる。 ●数値的には２６年度よりほぼすべての項目において伸びが見られるが、さらに伸ばすためには何を、いつまでに、どうすればよいかと考える姿勢も必要である。
(２) 学校評価結果を踏まえた学校運営の改善について	ア 教育課程を適切に実施している。	○人権尊重教育推進校としての研究を軸とした学校づくりが推進されてきている。教職員・生徒の人権感覚の向上を始め、組織的な授業改善、心の教育の充実、地域・保護者との連携、教職員の育成などを体系化している。 ○特別支援教育においては、学年や発達段階に応じたグループ編成により、ティーム・ティーチングを活用したスモールステップでの授業の展開している。また、授業の効果を上げるために、ICT 機器や実物投影機及び自主作成教材・教具の活用を積極的に図っている。 ●週ごとの指導計画の記入が以前に比べて格段に改善されているものの、「書かされている」「管理職の命だから、やむを得ず書いている」「備忘録ではなく、自分の授業の質を高めるための計画書として書く」という姿勢が伝わってくる。授業計画には、生徒が驚きの声をあげるような工夫を入れるとよい。
	イ 組織的な学校運営を行っている。	○組織的な学校運営の実現のための数年に及ぶ経営努力が結実しつつある。人権尊重教育推進校としての研究を契機として、日常のあらゆる場面での全教職員が一丸となった組織的な活動の重要性を認識させてきている。保護者・地域にも理解されており、より協力的になっている。 ○基礎的・基本的な学力の定着を図るために、学習の基礎である「ことば」の力を付けるよう、すべての教科等において「聴く・伝える・考える」言語活動を重視している。また、サマースクールの実施については積極的に声かけをする努力により効果を上げている。 ●生活指導の数値が前年度に比べて劇的に上昇している。この数値を維持するためには、生活指導の技法について全教職員が理解し習得して、組織的な生活指導を継続させるようにする必要がある。

	ウ 家庭や地域と連携して学校の教育活動を進めている。	○生活指導に関しては、組織的で素早い、誠実な対応を基調としつつ、家庭や地域と連携した対応がみられるようになり、教職員の努力に信頼を寄せてきている。 ○保護者に対する教職員の対応として、「親切、丁寧、誠実」に心がけ、まずは話を聞く、受容と共感に努めるなどの日常の細やかな対応が徹底してきており、保護者との連携強化につながっている。 ○PTA 役員や、その OB を含む地域の関係者の間に、「学校には協力するものだ」という雰囲気がある。3 年前においても、強く感じたことである。どうすることが現時点で最善かを斟酌することのできる、非常にモラルの高い地域、保護者である。
(3) その他	・ 特色ある教育活動を積極的に進めている。 ・ 特筆すべき優れた取組を行っている。	○日々の給食献立の紹介を手紙文で学級に届ける栄養士及び給食室の活動は、食育指導の充実を始め、季節の食材、諸外国の料理などの食文化を学ぶ機会となるとともに、心の教育につながる取組である。 ○学校としてなすべき基本的なことを、丁寧に、可能な限り組織的に行おうとしている。公立学校の経営姿勢として非常に健全であると考ええる。 ●「信頼関係を基盤とした心を育てる学校づくり」のテーマを掲げ、東京都教育委員会人権尊重教育推進校として人間関係、家庭・地域との連携、安全・安心、規律性の重視などを重点とした研究を進めてきている。心を育てる生徒の育成に向けて全教職員挙げての研究は、組織力の強化にもつながってきている。今後は人権教育を更に充実させて、学校の特色として発展させていくことが望まれる。
	・ 校区内の学校で連携して、教育活動を進めている。	●「第八中学校区小・中連携子ども育成プラン」に基づいた活動については校区の小学校との連携を通じて、外国語教育カリキュラムによる一貫した指導及び、出前授業、交流授業、挨拶運動などの内容の充実が年々図られてきている。二校の管理職をはじめ教務主任、生活指導主任同士の小・中連携連絡会は教員間の相互理解を図る上で重要との認識が双方にあり、有機的に機能している。さらには、保護者・地域の理解を得るための情報・発信の工夫が望まれる。 ●地域の小学校も、第八中学校の努力と変化を認めている。「なぜ公立中学校に進ませたいと思ったのか」という本音の部分、小学校における進路指導現場と連携して丁寧に拾い上げ、公立中学校としての努力で応えられる部分を地道に構築していくことが肝要と考える。

4 総合評価

- 年々練り上げられてきた学校経営方針の具現化が学校の改善・改革につながるとの継続的な努力が結実しつつある。「信頼関係を基盤とした心の通い合う学校づくり」を学校経営方針として掲げるとともに、人権尊重教育研究校のテーマとしても位置付け、経営改善に向けた新たな方針が全教職員に周知されている。このことが保護者・地域にも理解され、一段と学校への支援が強化されてきていることがヒアリングでも確認できた。
- 人権尊重教育推進校としての公開研究発表会における成果と課題を教職員の組織的な取組の好機ととらえ、次年度の学校経営の充実のために生かされることを切望する。
- 「こういう学校にしたい」という校長の理念およびその具現化に向けた粘り強い意欲と、それに呼応する強い意志と高い職能を有する教職員との出会いがあって、現在の落ち着いた第八中学校がある。成果の劣化や風化を避けるためには、運営、経営を個人的な力量のレベルにとどめず、組織化することが必要である。